

貝と人とのかかわり：利用にみる地域資源と文化

武田 淳*

(地域資源学研究室)

平成15年9月19日 受理

Shells and humans as viewed from local-resource utilization and culture

Jun TAKEDA

(Laboratory of Ecological Anthropology and Marine Ethnobiology,
Department of Resource Management and Social Sciences)

Received September 19, 2003

Summary

The culture between shells and humans has been established since ancient times. The close relationship has been deeply rooted in the way of life of human beings, for shells have been used as foodstuffs, utensils for daily life, shell money, ornaments, items concerned with rituals, and so on.

There are biotic varieties in especially the southern part of subtropical and/or tropical areas which are gathered with ease. In the case of the Ryukyu Archipelago, the history of the utilization of shells has been dated to pre-historic times for about 3500 years through the Kingdom of the Ryukyu, which has brought about many kinds of shell utilization and an originally developed shell culture in Okinawa. They are composed of 40 species belonging to 16 families of conch shells and 12 bivalve families.

It is now said that there are shells of 80,000 to 100,000 in number of species living on this earth. Among them, shells with the most familiar and important relation to humans are described here and analyzed in terms of local-resource utilization and culture. They are categorized into utilization type as follows: foodstuffs, items concerned with subsistence and daily life, goods involved with beliefs and rituals, local healing systems and medicine, playthings, ornaments, shell money, status symbols, and communication means or musical instruments. Besides, one category has been added to include dangerous or toxic shells, which may sometimes cause the death of humans in times of shell-gathering.

はじめに

「私の耳は貝の殻 海の響きをなつかしむ」
(ジャン コクトー, 組詩「カンヌ」の第5番「耳」より)

芸術のあらゆるジャンルで活躍した、かの有名なフランスの鬼オジャン コクトーが31歳の

* E-mail address: takedaj@cc.saga-u.ac.jp

時に地中海に面したカンヌで作った詩である。

巻貝の殻をそっと耳に押しあてれば、人は誰でもはるか遠くの宇宙にある渦潮・ブラックホールにすうっと吸い込まれていくような錯覚におちいる。貝が運んでくれる海の響き (ocean whistle) である。貝がもつ多様な形、模様や色彩にそして美しさ、多彩さやすばらしさに魅了されないヒトはいないだろう。

海や川に産する貝と人類とのかかわりは古い。食料、生活道具、貨幣、装飾品、儀式の祭具などに利用してきたヒトの歴史はながく、生活にも深くかかわってきた。

遺跡から多量に出土する貝は、食用の対象としてきたものの残渣 (ごんさ) であることが多いが、往時の人々が身近な生活用具や様々な道具として利用してきたものもある。

貝類の民俗や民族文化に関する先行研究に加えて、南西諸島、韓国やオセアニアにおける現地調査で得た資料と情報を整理し、貝とヒトとのかかわりの深さと長さを知る手がかりを提示してみる。そして海からの贈りもの「貝」にまつわる地域資源と民族文化の一郭を知り、その多様さを垣間見てもらえば、幸いである。

その関係は次の九つに大きく分類できる。1. 食用, 2. 生活・生業用具, 3. 信仰や神事にかかわるもの, 4. 民間療法, 5. 遊戯用具, 6. 装飾品, 7. 貨幣, 8. ステータスシンボル, 9. 通信手段・楽器である。

最後に人類の生活には有用ではあるが、採取のさいに危険をとまなう貝の項目を一つもうけたのは、美しいバラには棘があるように貝にも恐ろしい一面をもつ貝があることを喚起するために参考までに付してみた。

1. 食用にする貝

貝は狩猟採集経済時代から動物性たんぱく源として重要であった。陸生の野生動物を狩猟する場合と異なり、大した道具を使わないで採取ができるばかりか、周年を通して、特殊な技術や体力を労しないでも採取が可能である。また成果がまったくゼロということもない。いわば「坊主」(「収穫がなく手ぶらの状態」という意味) で帰ることはまずありえない。しかも、女性、子どもや老人などでも貝類の採取が容易である点も、食物獲得が最優先事項になる狩猟採集時代において採取活動がもつ意義は大きかった。貝塚などから大量に出てくる貝類も我々の祖先が食用にしてきたさまざまな貝類の残渣といえる。

遺跡などから出土する貝の種類は多岐におよぶが、日常的なものとしては我々が寿司種 (鮭種: すしだね: すしねた) として慣れ親しんでいるものとあまり大差ない。しかし、深さ20~30メートルほどのところに生息し、その採取に特殊な潜水能力や潜水技術を要するタイラギ (写真1) のようなものは、遺跡から出土するケースは少ない。ここ二千年のあいだの気候変動や当時の潜水技術である「素潜り」(すもぐり) の技術を検討してみる必要はあるが、水深30~40メートルのところに生息する熱帯性のゴホウラ (武田, 1997) は弥生時代に貝輪の材料として採集されていた事実がある。すでに南島との交易によって運ばれ、西南日本で50におよぶ遺跡からゴホウラ製貝輪が出土しているのは驚異である。

現代の日本人の食生活にもっとも身近な貝にハマグリ、アサリやシジミ (注1) がある。ハマグリは殻の形や色が栗に似ていることから「浜栗」の字も使われる。桃の節句には縁起物として欠かせない。貝類のなかで供給量ももっとも多いが、国内ではほとんど採れなくなり、中国や北朝鮮からの輸入ものに依存しているのが現状である。「地ハマ」と呼ばれる熊本県産などの国内産の値段は、輸入物と比べると8~10倍と高い。とくに春の貝は産卵を前にして身が丸々と太り、フキノトウにも似たほろ苦さがあり、好まれる。

またアサリは潮干狩りを代表する貝であるが、国内では伊勢湾や静岡県・浜名湖で採れるものの、消費のおよそ半分は韓国や中国産の輸入物に依存している。黒っぽい縞模様がはっきりしている殻の国内物に対して、輸入物は殻が白っぽいのが特徴になる。

一方、ヤマトシジミを産する島根県・宍道湖とセタシジミを産する滋賀県・琵琶湖は、国内二大シジミの産地である（注2）。輸入物に依存するハマグリやアサリと異なり、減少傾向であるが、国内物が全体の8割を占めている。しかし、減少傾向にあるため、最近では五月から七月までの三ヶ月の禁漁期間を設定したり、人工増殖をも試みるようになった。中国、台湾、韓国や北朝鮮などからも輸入されているが、その中で中国が一番多いと思われる。貝に含まれる必須アミノ酸メチニオンが肝臓の働きを助け、二日酔いによく効く貝として珍重される。2003年冬から春にかけて新型肺炎（SARS: Severe Acute Respiratory Syndrome）が猛威をふるってから、シジミの輸入は極端に少なくなった。

寿司種に人気があるアカガイも、かつては全国どこでも採れたが、現在などからの輸入物に依存している。また回転寿司屋で使われるアワビも、メキシコなどから輸入したアワビモドキであることが多い。

貝であれば、美味しさ、不味さを問わなければ、どの貝でも食用は可能であろう（写真2）。ただし、日常的に食されるハマグリ、アサリ、シジミの他に代表的な貝として、ホタテガイ、アワビ（注3）、トコブシ、サザエ、マガキ（注4）、タイラギ、アゲマキガイ（写真3-1~2）、オオノガイ（現代では一般に食用としないが、古代貢ぎ物として使われた）、アカガイ、シャコガイ（注5）、ヤコウガイ、バカガイ（別名、アオヤギ）、ミルガイ（別名、ミルクイガイでバカガイ科）などがごく身近な貝として店頭に並ぶ。またイボニシ、レイシ、スガイ（膝で叩いて出して食べる：鹿児島・上甑）、クボガイ、オオコシダカガンガラ、コシダカガンガラ、クマノコガイ、イシダタミ、ヒメクボガイなどは磯で採集されるので、ごちゃ混ぜにして「磯もの」として市場で売られることが多い。他にオオエッチュウバイ、カガミガイ、ヒザラガイ（注6）、ムラサキガイ、ツメタガイ、ナミガイ、ケボリシタタダミ（飢饉食：長崎・鷹島、青島）、イタヤガイ（注7）、ボウシュウボラ、ミクリガイ、ウミギクガイ（貝柱が太く美味で、一部の地域で食べられているが、どこでも数多く採れないために食用としての販売はない：注8）、ナミガイ（キヌマトイガイ科で水管の部分）、タマキガイの一部、コウイカ（頭足綱）の仲間など多種にわたる貝が食用に供される。有明海に産し、食べられるシャミンセンガイは貝という名前はついていないが、触手動物の腕足類である（武田，1999a；2002a）。他に淡水産のものとしてタニシの仲間が加わる（武田，1996）。地域によっては一般に採集できるカワニナも自家消費されるが、市場での販売はない。

2. 生活あるいは生業用具としての貝

2-1. 容器あるいは食器（鍋、鉢、皿、杓子、匙やコップ）、包丁、穂摘み具や海藻刈り（搔器）：

貝包丁や有孔貝製品として考古学的に出土する貝もあるが、クロチョウガイ、アコヤガイ、ミドリアオリガイ、リュウキユウバカガイが包丁として、アワビが穀物の収穫具として、フィリピン・マノボ族は穂摘み具としてムラサキマルシジミの仲間を穂摘み具として使う。

マイクロネシア・ファイス島ではシャコガイやトウカムリガイ（注9）は斧や手斧の刃（遠藤・印東，2000）として、また長崎や鹿児島・指宿ではシレナシジミやイタヤガイを杓子・玉杓子として使う。

大型のヤコウガイを柄杓状容器として、水管溝部で作ったやや小型のソデガイの仲間である

ゴウホラヤクモガイ, タカラガイ (注10), 小型のヤコウガイ, メンガイ (オモテガイ) やオオベッコウガサは精製品の食器になる。また非精製品の匙状容器にヤコウガイが, 水磨をうけたシャコガイ, ウミギク, タカラガイやヨメガカサ (鹿児島・佐多) の皿状容器がある。

鍋に使われるものにトウカムリガイ (ミクロネシア・フェイス島) とホラガイ (注11) がある。ホラガイは西ジャワでサラムンカルと呼ばれ, 船底にたまった海水の汲み出しにも使われるし, 沖縄でもブラヤクケンと呼び, 近年まで湯沸かしに使っていた。

シャコガイはミクロネシアのヤップ島では *Betelnut chewing* (武田・川端・松尾, 2000; Rooney, 1993) を作るさいにヤシ科のピンロウジュの実をつぶすための杵に使う。

2-2. 衣類・被服にかかわる貝:

タイラギが海底に付着するための足糸だけで布に織ったり, 編んだり, そのまま房状の飾りにして使っていた (Simard, et al, 2000). とくに南イタリアのターラントが有名で, その加工技術は漁師の秘伝だったという (寺田貴子, 私信)。

また衣類に使われるボタン材料の貝は, 真珠層が発達し, 光沢のあるものが好まれて使われた。人工的につくられた化学的な製品 (可塑性の合成樹脂やプラスチック) が出回る以前は, ボタンの天然素材としてアワビとハマグリ (静岡・相良), サザエ, サラサバテイ (タカセガイ), ヒロセガイ, シロチョウガイが使われてきた。

頑丈で色もデザインも多彩なプラスチックのボタンが主流になり, 貝を丸くくりぬき, 穴をあける貝ボタンは高級な衣類などに使われているものの, 貝ボタンを製造する業者も少なくなった。

オーストラリア大陸の北方に位置するトレス海峡に浮かぶ木曜島 (司馬, 1977) やアラフラ海で明治末頃から大正, 昭和時代にかけて日本人ダイバー (和歌山県古座川沿いの農村出身の人が多い) が採取したシロチョウガイ, クロチョウガイやサラサバテイが, ヨーロッパの貴婦人たちの胸を飾る高級貝ボタンの材料になった。そのころのダイバーたちが潜ったときの副産物として, カムリボラ科 (注12) の大型の貝アラフラオオニシとガクフボラ科のブランデーガイ (水深10~40mの砂底に生息し, 稀産種である貝の名前は, ダイバーが採取したものを当時, 白人たちがブランデー 1本と交換したことに由来する) が大量にあがった (武田, 1995)。しかし当時, 日本でボタンとして使われていた貝は中国南部に産する貝を大量に輸入したものが, ごく一般的なものであった。

貝紫 (注13) は帝王紫, ティリアンパープル (Tyrian purple), 古代ツロ紫とも呼ばれ, アクキガイの仲間の貝のパープル腺 (鰓下腺: hypobranchial gland) から採取される。パープルと言えば, ヨーロッパでは貝紫を指すほど, 生活に深くかかわっていたことを物語る (武田, 1999b; 2002b)。鰓下腺から分泌される色素は, 貝殻から抽出したときには色がないが, 日光にさらされると徐々に黄色から緑色へ変化し, 最後には紫色っぽい紅色に変化する (寺田, 2001)。

貝から抽出される染料は, フェニキアのテュロス (Tyre) やシドン (Sidon) の港町で製造された。当時, 貝紫で染めた布は最高位の衣服に用いられた。古代イスラエルの寺院の最高位の僧侶の法衣も, 貝紫の染料で染められたものであったし, ローマでもジュリアス シーザーとオーガスタ シーザーだけしか紫色の衣服の着用は許されず, 政府高官も紫色の縞模様の衣を着けた。

中世の僧侶たちの写本の羊皮紙を染めるのにも使われた。古代のペルー人たちもこの技術を知っていて, メキシコやグアテマラでは今なお染料として使われている (寺田, 2001)。

日本では織物文化が栄えた弥生時代以降, 赤や青, 紫などの染色は茜 (アカネ), 藍 (アイ) や紫根 (シコン) などの植物性染料で染められ, 動物性起源の紫はないと信じられていた。そ

のため、吉野ヶ里遺跡から出土したのも当初、定説に従って紫根染めであると発表されたが、平成3年になって古代布（染色）研究家の前田雨城（財団法人・古代学協会）らが科学分析をしたところ「貝紫」であることが判明し、斯界の反響を呼んだ。

日本では佐賀県・吉野ヶ里遺跡から出土した布片が貝紫で染められていたという分析データをもとに、長崎市在住の織物研究者・寺田貴子（玉木女子短期大学助教授）が平成5年に有明海に生息するアカニシを材料に幻の古代染色である貝紫の再現に成功した。しかも寺田は長崎県有明町に伝わる伝統的な島原木綿と沖縄の首里上布の縞文様をいかして濃紺と「かめのぞき」という薄藍色、それに二種類の貝紫の糸を入れて縞を決め、約一ヶ月の工程を経て美しい貝紫の縞木綿を織り上げた。

地中海ではシロツブリ（イスラエル）やシリアツブリ（ローマ）、メキシコやグアテマラではサラレイシとヒメレイシ、ペルーではアワビモドキとサラレイシなどの鰓下腺が利用されている。また日本の海女たちが海に潜るとき使う磯手拭いや磯金に呪符として、木片や竹片でイボニシの内臓からとり出したパープル腺で印をつけた。植物性起源の染料とちがひ、貝紫は海水に浸かっても消えたり、色が褪せない特性を利用して、漁師たちが自分の着衣などに印を付けた。自分の所有物であることを示すばかりか、溺死したときなどには名札代わりにも役立った。

青みがかった紫でユダヤ人が祈祷用の肩掛けの織り糸を染めるのにコシダカアサガオガイやアイルランドなどの北大西洋に産するヨーロッパチヂミボラの鰓下腺が使われた。

2-3. 漁撈、狩猟、農耕や採捕などの生業にかかわる貝：

釣り針、タコとり、漁網の錘（おもり：沈子）、鎌（やじり）などの漁撈のさいに使われる貝製の道具がある。リュウキュウサルボウヤカラガイが軽い漁網錘に、メンガイやシャコガイが重い漁網錘として使われる。他にシラナミガイ、ヒメシャコガイ、ソメワケグリガイ、ヌノメガイ、クチベニツキガイ、リュウキュウマスオガイ、チョウセンハマグリ、タカラガイ、メンガイ、サザナミスイショウガイやファイリピン南部スルー諸島サマでのホシダカラガイなどもその用途に使われた。

釣り針に使われる貝には、北海道・有珠モシリ遺跡でアワビ、単式釣り針としてヤコウガイやマルサザエ（クック諸島・マンガイア島）やクロチョウガイ（マンガイア島；ミクロネシア・ヌクオロ環礁）がある。またシンジュガイをトローリング漁の釣り針のシャンク（釣り針の軸部：shank）にしたものがミクロネシア・ファイス島で出土した（遠藤・印東，2000）。

クロチョウガイやヤコウガイは鎌に使われた。

イイダコ捕りの釣り具と誘引具に、福岡・津屋崎ではベンケイガイとタマキガイが、兵庫・明石と千葉・富津では地方によってはオオハマグリとも呼ばれるウチムラサキガイが、明石と新潟・中条でアカニシがある。干潟の水産資源が豊富に、活発に採捕されている韓国・全羅南道の順天や麗水などでもアカニシを使ったイイダコ漁（写真4）が盛んである。ポリネシアのハワイやメラネシアのトンガでは、タカラガイがタコとり用擬似餌として、またホシダカラをタコの脅しに使う。岩などにくっついて動かないでいるタコをこの貝で威嚇し、岩から離れた瞬間を捕らえる。さらに南西諸島の沖縄本島の平安座や八重山でもチョウセンフデガイを使い、アナダコをおびき寄せてタコを捕る漁法がある（武田，1994a）。

刺突具には、突起先端部と貝殻の厚い部分を利用したスイジガイや水管溝付近を加工したクモガイ、サソリガイ、イトマキボラ、オニコブシ、ゴホウラやホラガイがある。

隠岐ではアワビを海藻取り（摘み）に使った。

1952年山口・土井ヶ浜遺跡で出土し、貝輪とみなされてきたゴホウラは弓具の軛（とも）だっ

た(大島, 1989)。

加工具としての刃器には、貝斧として大型シャコガイの蝶番部を利用したものが南西諸島で出土する。ミクロネシアのパラオ島やフィリピンでも使われていて、南方の貝文化とのつながりを暗示するものがある。

腹縁部を研磨したシレナシジミやクロチョウガイを貝刃として、従来、一種の万能刃器と考えられてきたヤコウガイの蓋を敲打器に使う。

実や樹皮を削ったり、皮をなめしたりするための貝がある。メラネシアのソロモン諸島・マライタ島では、ヒルギ科のオヒルギ(アカバナヒルギ)の種子を削るのにヤエヤマヒルギシジミ(シレナシジミ)(武田・大山, 1989; Takeda and Ohyama, 1994)を使う。それを水に晒してから食用にし、ココナツスープに入れたものは毎日の食卓にのぼる。またタカラガイはミクロネシア・トラック島でバンノキ(武田, 1994b, 2003b)の実の皮むきに使われる。さらに北海道・有珠モシリ遺跡から出土したアカニシの貝輪は皮なめし具として使われた可能性がある(大島他, 1990)。

2-4. 貝殻灰や貝殻の粉として使われる貝:

貝殻はアラゴナイト(霰石とも呼ばれる炭酸カルシウム)の結晶体で、特殊な方解石でもある石灰の層から成る。また土地改良剤としてニューイングランド地方のインディアンたちは貝殻を砕いたものを土に混ぜた。また消石灰を作るために貝殻を焼いていた。

土器の製作中のひび割れ防止の緩和剤として、太平洋の全域では木彫りや仮面の塗料としても広く使われている。しかし、1938年にアメリカの河川に移入されたシジミの仲間は、セメントの材料となる川底の小石に混じり、セメントの質を落とした。

また継ぎ目の詰め物として膠や詰めものの混合物にも使われる例がある。紅海の沿岸地域では、貝殻の粉をサメの油で練ったもので舟板の隙間を埋める。さらに南アラスカのトリンジット族は木箱の継ぎ目の詰めものにハマグリの貝殻を焼いて作った粉をアザラシの血と油を混ぜ、さらにサケの卵を加えて練り合わせて作った糊を使った。

2-5. その他、興奮剤・陶酔剤など:

アンデスのインディアンは、ココアの葉から一種の麻酔剤を抽出するのに貝殻灰を使う。北米インディアンは刻みタバコと川から採った貝殻を焼いてつくった粉を混ぜて吸う。またメラネシアやミクロネシアなどの太平洋、アジアの一部、マダガスカルなどではアルカロイドを含むヤシ科のピンロウジュの実と、石灰あるいは貝殻石灰を一緒にしたものをコショウ科のキンマの葉でくるんで噛む習慣(Betel chewing habit)がある。ミクロネシアのヤップ島では、ピンロウジュの実を潰すのにシャコガイ製の杵を使い、フィリピンのハヌノ族は、この習慣のために大型のイモガイ(注14)の一種アンボンクロザメで作った貝の容器に貝殻石灰を入れて持ち歩く。

マガキの殻を洗い、大きな石臼でひいた粒の粗い粉末をニワトリなどの餌にし、カルシウムを補給し、硬い卵の殻を期した。銚子ではかつてこれらの粉末を店に卸し、大半は大阪のカルシウム会社へ出したという。またコウイカの甲板(「舟板」ともいう)は、石灰質でできているために愛鳥家は鳥の石灰補給に利用した。

鳥取・湊などでは、かつて子どもが外で大便をしたときにハコトリガイとかババトリガイと称してタイラギの貝殻を使った。

3. 民間信仰や神事などに使われる貝

日本では子安貝ともいわれるハチジョウダカラを安産のお守りとした地方が多い。昔、出産

の時に両手にこの貝を握りしめ、難産を防いだし、魔除け、災難除けに煙草入れの飾りにも用いた。

また魔除け、火難よけ（火伏せ）や難除けとしてスイジガイを軒下や竈（かまど）の脇などに吊るし、火魔除けにするとところがある。沖縄では、スイジガイの突起が「水」の字と言われるように「水」と読めるために火災よけのお守りに屋根に取り付ける習慣がある。また畜舎の前とか門にも魔除けとしてスイジガイを吊す。

祝い事の贈答品やお年玉袋に使われる熨斗（のし）は今では印刷した紙製品が使われることが多いが、昔はアワビの肉を平たく伸ばして干した熨斗鮑が使われていた。しかし、伊勢神宮では今でもアワビの熨斗を使う。結納のさいにも欠かせない縁起がよい貝とされるアワビは、武士の出陣などの祝儀に使われたり、干したものは戦場での保存食にもなった。ただし、高価なために結納品の熨斗に使われる機会も減り、ビニール素材のものにとって替るようになった。初夏から夏場だけに生産は限られるが、佐賀県川副（かわそえ）町早津江（はやつえ）に有明海特産のウミタケの水管をミンチ状にし天日乾燥したもので熨斗を作る業者がいる。

また、江戸時代には病氣平癒、長寿や魔除けにも用いられた（大場、2000）。

タニシを水神の使令として崇める信仰がある（武田、1996）。秋田の由利や平鹿あるいは宮城・刈田では新春の初タニシを屋根越しに投げたり、宮城・登米では初タニシの殻を自在鉤に吊ると家に悪い虫がわかないと信じられていた。群馬・邑楽では瘧（おこり）が出たときにタニシを敷居の下に埋め、病気が治れば川に流したり、香川・観音寺では釜の上に枡を伏せ、その上に生きたタニシをのせて、落ちたタニシを逃がせば瘧はなくなるという。

タモガイを上向きに吊るし、口を外に向けておくと、口と角の威力で邪気を追い払う。また葉縁にたくさんの棘があるヒイラギを悪魔除けに使うところが多いが、同じような効力を信じて、ホネガイを戸口に刺したり、吊したりする。

アワビは魔除け、流行病除け、玄関口に吊って病氣除け、スイジガイのように鶏小屋の網に吊るしてイタチ除け、家畜の病氣除けや屋根裏に掛けてネズミ除けに使われる。

魔除けとしてウミウサギを赤子の枕元に置いたり、ホラガイやシャコガイをやはり魔除けとして東大寺二月堂のお水取りのさいの鬼退治にも使われる。

富山・氷見ではシジミの殻を捨てておけばヘビが来ないというし、静岡・御殿場ではサザエの殻を棒にさして畑に立てておくとヘビが来ないと信じられている。

吉兆などに使う例として、スガイを入れた容器に酢を加えると貝は泡を出して回るが、止まった方向で失せ物や犯人を探し出すのに利用したり、タニシで戦果を占ったり、正月二日の晩は悪い夢を見ないようにタニシを食べる風習があった。山形・飯豊（いいで）ではニッポンマメシジミで豊作を祈願したり、岩手では耳の病気のときに神社とか地蔵さまにアワビを奉納したり、青森・三戸では妊娠5～6月目に妊婦がアワビを食べると子供が眼病に罹らないと信じられていた。

また目の悪い人が田から拾ってきたタニシを山に向かって投げる。その後、2、3年は食べない。あるいは栃木・芳賀では吹き出ものが出たら、増井の阿弥陀さまの御手洗水で洗うと治ると信じられていて、治ったときはお礼に自分の歳の数だけタニシを捧げる。山形では夏のタニシを嫁に食わすと子ができないという。

千葉・白浜や布良（めら）では、耳だれや耳の悪くなった人はオオヘビガイを地蔵さまに捧げるし、千葉・富浦ではハイガイを拾うと母の乳が腫れるという。また大分では土用の丑の日にかワニナを食べると病気をしないと信じられている。

神事に使われる貝として、福岡・鐘崎や佐賀・名護屋では穴が一つあいたアワビは、エビス

貝と呼んで珍重し、海女や海士のあいだで縁起がいいものとして荒神さまに供える。

沖縄本島ではツキヒガイ、センニンガイやアラスジケマンガイは拝所（ウガンジョ）や御嶽（ウタキ）などの聖地に供える風習がある。また弥生前期末頃に属する種子島・広田の埋葬遺跡から出土したヤコウガイの貝匙は、日常用品でなくて、巫女たちが神事のときに用いられたものと考えられている。

シイボルトコギセルは、旅の守りとして重宝された。それは乾燥に強く、1年くらいは殻の中で生きている（大谷洋子、私信）ために、昔は旅をするときにお守りの中に入れて旅の安全を願った。

天気の子知にかかわるものとして、千葉・勝浦でダンベイキサゴがある。採集の最盛期が6～8月であるダンベイキサゴの採取量が悪いと冷夏になるといわれ、鹿児島・志布志ではダンベイキサゴが浅瀬に多く見られたり、たくさんとれると飢饉の年になるという。

また8～9月に海藻の一種カジメを採餌するサザエがカジメから落ちると翌日、時化（しけ）るといわれたり、タニシが水から上がっていると雨になる。さらにカワニナが岸に寄ると鉄砲水が出る。あるいは、雨の前後は野菜や木の葉などを這うカタツムリが木に登るのは雨の前兆で、木から降りるのは晴れの前兆という。

4. 民間療法に使われる貝

さまざまな動植物を伝統的な医薬や療法に利用する民族は、日本に限らず広く諸外国でもみられる（武田, 2002c; Takeda, 1998）。川名（1988）に詳しいが、いくつか代表的なものだけを記載してみる。ナメクジは風邪や扁桃腺炎などに罹った時の民間療法としてよく使われるが、貝の場合、殻を砕いたものが使われる。タニシの効能は肺炎、結核、熱さまし、小児のひきつけ、黄疸、心臓病、腹膜炎、下痢、疫痢、痔、脱肛、脚気、眼病、夜盲症、腋臭、腫れ物、火傷、喉の病気、流産の出血止めや強精と多岐にわたる。カタツムリは百日咳、喘息、痰、腎臓炎、下痢、駆虫剤、痔、淋病、寝小便、眼病、腫れ物、喉の病気、婦人病、万病の薬として、シジミは百日咳、のぼせ、腎臓炎、肝臓病、黄疸、寝小便、鳥目、眼病、乳の出をよくするために、サザエは喘息に、サザエの蓋は百日咳、目の打撲、養毛に、アサリは黄疸に、マガキは心臓病、腎臓病、肝臓病に、アワビは下痢、赤痢、視力回復、しもやけ、打身、骨折、養毛に、オニサザエとカコボラは解熱に、カラスガイやホラガイは腫れものやできものに、カワニナは解熱、黄疸、胃痙攣、淋病、腹痛、夏痩せに、マガキはしゃっくりに、シャコガイはのぼせに、キセルガイは疳の虫に、オオタキコギセルは肝臓病、黄疸、腎臓病に、ツムガタキセルモドキは肝臓病に、ヒメイトマキボラ、オオナルトボラやボウシュウボラは寝小便に、ハマグリは火傷や寝小便に効くと信じる民間医療がある。

他に関東より北ではヒカリギセルを炒って、内臓に関わる漢方薬として珍重するところがある（大谷洋子、私信）。

また、赤ん坊が引きつけを起こしたとき、あるいは赤子の夜泣きや枕元に置くと泣きやむといわれる貝にはコナガニシ（広島・呉）、ナガニシ（千葉・富津）、キセルガイ（熊本や岡山・川上）、シイボルトコギセル（熊本・宮原）、キュウシュウナミコギセル（熊本・玉名）、ギユリキギセル（熊本・球磨）やオキギセル（鹿児島・出水）がある。

5. 遊戯用具としての貝

玩具として、キサゴ、ハナマルユキ、メダカラやオミナエシダカラをおはじきに使う。ガラス製のおはじきが出回る以前の明治から大正期には、染色したニシキウズガイ科の貝を「きや

しご」と呼び、子どもたちは貝殻をおはじきにして指ではじいて遊んだ。

テングニシとアカニシやナガニシ（長崎・対馬）の卵囊（らんとう）から作った海ほおずき（注15）がある。採取した卵囊の中身を抜き、赤色や黄色に化学染料などで反応させたものが夜店や縁日や海岸沿いの店屋などで売られていたものを子どもたちが買って、口に含んで鳴らして遊ぶ。卵囊の形状の違いから種々の名があるが、代表的なものにアカニシの卵囊から作った「長刀（なぎなた）ほうずき」とテングニシの卵囊から作った「軍配（ぐんばい）ほうずき」がもっともポピュラーである。

平安時代の末頃から貴族の女性、あるいはお姫さまのあいだで始まった室内遊びの貝合わせ（「貝覆い」とも呼ばれる）はカルタ遊びの元祖のようなものである。手で握れるくらいの大きさのハマグリの貝殻360個を一組にして、左殻の地貝（じがい：陽）と右殻の出貝（だしがい：陰）を別々の八角形の貝桶（注16）に分けて入れて保管する（注17）。石灰水に浸して薄皮をむき、磨いた貝殻の内側には胡粉（ごふん：注18）を塗り、源氏絵巻、伊勢物語、花鳥等をテーマにし、金箔などを使った極彩色で、左右同一の絵柄が描かれる（大谷，2002）。

同じ絵を描いた貝を合わせて、その数を競うものでトランプ遊びの「神経衰弱」に似たゲームである。元々の貝合わせは、綺麗な貝を互いに出し合って、その綺麗さを競ったもので、本来ハマグリ以外は使われなかったが、アサリ、イタヤガイやアワビなどの貝殻も貝合わせの変形の遊びとして使われることもあった。

江戸時代になると貝合わせは嫁入り道具の一つになった（大谷，2002）。ハマグリは他の貝とはピッタリ合わないというところから、一生を添いとげるようにと願う親心が、親から子へ貝合わせを贈るようになったものであろう。

鑄物の「べいごま」が出回る以前の江戸から明治時代、子どもたちはイモガイやバイガイの殻の中に砂や鉛を入れたものをべいごまにして遊んだ。「喧嘩ゴマ」とも呼ばれるように互いに独楽（こま：注19）をぶっつけあって、はじき出したコマが勝者になる。またイモガイやマガキガイを独楽にして遊んだり、タカラガイ（千葉・富浦）を単にぶっつけ合って遊んだ。

和歌山・串本では、ムシロガイ科の貝を長さ20センチほどの細い紐の両端に貝を結び、空中に投げて、トンボを糸にからみつかせてトンボを捕って遊んだ。

他に玩具として使われる貝にはキヌガサガイ、ハナビラダカラ、ホシダカラ、ハチジョウダカラ、サラサバテイ、スイジガイやアマオブネがある。

アカニシは、おしゃぶりとか、「チュツチュツ」とも呼び、乳首の恋しい子供の慰みや離乳時に使う乳首（ちくび）に使われた。

プラスチック製の碁石も多くなったが、宮崎・日向産で半化石のハマグリの貝殻は厚くて上質の白石として珍重される。これに対して黒石は、和歌山産の那智の黒石が最高といわれる。

昭和40年代、海辺の地方ではホタテガイやホッキガイ（北海道）、ウチムラサキガイ（兵庫）の貝殻に紐をつけて、「コッポリ」と称して下駄の代わりにして遊んだところもあった。その後、缶詰が普及し、その空き缶に紐をつけるものによって替わった（西宮市貝類館，2002）。

6. 装飾品などに使われる貝

現代において貝の装飾品を代表するものに真珠がある。ゴホウラなどの厚手の白色貝のほかにイモガイ、マクラガイ、タケノコガイ、フデガイ、タマガイ、ウミウサギやノシガイなども装飾品の貝になる。

六月の誕生石としても宝石としても珍重される真珠には天然真珠（地貝と呼ばれる）と養殖真珠の二種類がある。養殖の歴史や真珠の製作工程などについては大谷（2003）に詳しいので

ここでは省く。養殖は沼や湖などの淡水と海水で行われているが、真円で、ピンク系のものが極上とされる。カキから出る真珠の価値は低い。第二次大戦前は貝殻核として中国産の淡水二枚貝のテンシンドブガイが使われた。戦後は中国産の貝の入手が困難になり、すべての養殖真珠の核はカワボタンの仲間である北米ミシシッピー河産の淡水二枚貝のピグトウガイ (pig-toe pearly mussel) やダイコクカワボタンガイ (nigger-head: ebony shell) に切り替わった。しかし、いずれも最近では資源の枯渇が目立つようになり、資源保護の目的で輸出が規制されるようになった貝である。

真珠をつくる貝にはダイオウイトマキボラ、巻貝のハルカゼヤシガイ、ヒメシャコガイやオオシャコガイ (注5を参照) など71種類もあるといわれているが、実際はおよそ30数種類くらいが正しいようである。真珠貝は昔から海女によって採集され、中に秘められた天然真珠は高貴薬としても利用されてきた。

天然真珠の採集はヨーロッパのシュメール時代にさかのぼる。当時の真珠はペルシャ湾 (アラビア湾)、インド、スリランカ、メキシコ、ベネズエラやパナマなどの海から採れた天然真珠であった。一方、日本では明治26年 (1893) に御木本幸吉翁が初めて真珠の養殖を手がけて成功した。真珠貝の内側に付着した貝付き真珠だったが、貝殻が外套膜によって造られることからヒントを得て貝殻と外套膜のあいだに半球の蠟石の核を挿入し、半円真珠をつくったのである。1950年ごろから、天然の稚貝を捕獲したものを筏で養殖して母貝に仕立てる母貝養殖法にとって代わった。

淡水真珠がアコヤガイ (注20) などと異なる点は核を挿入しない、いわゆる無核真珠 (ケシともいう) が中心であることと、外套膜の分泌作用を利用して、大きな外套膜の根元の部分に細胞片を移植することによってつくられることである。最近ではアコヤガイと同じように体内に核と細胞片を挿入し、有核の淡水真珠もつくられるようになった。淡水真珠の本命は無核真珠のすばらしい光沢にある。

アコヤガイの場合、今からおよそ130年前に発見された小型の真珠貝で、日本特産種と考えられていたが、韓国、中国、香港やスリランカなどでもこの貝を用いた養殖が行われている。

黒真珠をつくる母貝はクロチョウガイで、大型真珠貝で半円真珠がとれる。

マベガイの場合、奄美大島以南、東南アジア、インド・太平洋の海域の内湾に限られ、大型真珠貝で半円真珠がとれる。養殖が成功しているのは日本、マレーシアやタイくらいだけで、この貝から真円真珠をつくる試みは今のところ成功していない。メキシコの手にも小さなマベガイの仲間がかなり生息していて、古来、紫色の天然真珠が採集されていた。

ソデボラ科に属し、フロリダ州南東岸からバミューダにかけた海域や西インド諸島の砂底上に生息しているピンクガイも、天然の真珠を産する。

琵琶湖特産の大型の貝で淡水真珠養殖の母貝になるイケチョウガイは今日では中国でも大量生産されている。しかし、日本の淡水養殖の歴史はかなり古く、大正末期にすでに琵琶湖で行われていた。

また淡水真珠養殖の大型の母貝になるカラスガイは、ペルシャ湾の天然真珠に光沢、色や形が似ていて、無核真珠が中心になる。

螺鈿 (らでん) 細工や象嵌 (ぞうがん) 細工には良質の半円真珠ができるアワビやヤコウガイが、また大型真珠貝をつくるシロチョウガイとクロチョウガイが象嵌細工に使われる。いずれも真珠光沢のある美しい貝が使われるが、とくにアワビ、シロチョウガイ、ヤコウガイ、クロチョウガイなどが螺鈿細工や象嵌細工の切貝、摺り貝あるいは漆器細工のつや出しに、そして机、硯 (すずり) 箱、花瓶、ついでに、長持ちなどの装飾品にはめ込む材料に使われる。貝

殻を平らに研磨し、文様に切ったものを漆地に貼り付け、研ぎ出す技法は、中近東に起こり、インド、タイ、中国を経て日本に伝来したものだといわれる。

アワビは漆器のつや出しに貝の粉を漆に混ぜて漆器にすりこむと美しくなる。またシリア・ベドウィン族の女性たちは螺鈿を施した大切な小物や衣装を長持ちに入れ、常に施錠し鍵を持ち歩く。パナマクロチョウガイがアステカ時代のモザイク面の目や戦士の偶像に、イケチョウガイなどが簡単な細工に使われる。

貝輪、腕輪や釧（くしろ：腕輪の一種）に使われる貝もある。先史・古代時代においては、いろいろな製品が生産地から遠く離れた遠隔の地に運ばれた。先土器時代の黒曜石や縄文時代の翡翠（ひすい）製品や弥生時代の貝輪などはその代表で、いずれも産地から遠く離れた他の文化圏にもたらされたものである。北海道縄文時代（今から2000年から1300年前の弥生時代）の有珠モシリ遺跡から出土した南西海域産のイモガイ製ヨコ型貝輪は、従来の貝輪製品の東（北）限を一気に拡大することになった（大島，1989，1993a，1993b）。

巻貝を縦切りにしたタイプのもので、弥生時代前期末ごろ登場し、古墳時代前期におよぶ約600年ものあいだ、西南日本の各地で流布した。その貝の種類はこれまでテングニシと考えられてきたが、じつはその主役を担ったのは南海産の大型の巻貝ゴホウラであることを永井昌文教授（当時、九州大学医学部解剖学教室）が1969年の切断実験で明らかにした。

有色貝輪に使われた貝にはオオベッコウガサ、サラサバテイ、ベンケイガイ、テングニシ、アカガイ、イタボガキ、サルボウガイ、アカニシ、ウバガイ、エゾマキガイ、オオツタノハガイやウミギクがある。

縄文前期から弥生前期に着装した例では、男性の右腕に八個と、女性の左手に一個のオオベッコウガサの貝輪がある（大島，1989）。

サラサバテイとベンケイガイは連結式か、くり抜き式で縄文前期から一貫して出土し、北海道では多出する。北海道・有珠モシリ遺跡（有珠10遺跡）（大島他，1990）から出土した環状貝輪は、関東地方から東北地方に持ち込まれたものが北海道に再流失したのか、関東地方から直接搬入されたものであると考えられている。また陸中海岸や仙台湾周辺でもっとも盛行したアカガイやイタボガキ製貝輪は、北海道へまったく運び込まれておらず、ベンケイガイ製貝輪のみが選択的に持ち込まれた。さらにアカガイ、イタボガキやサルボウガイは太平洋側の陸中海岸や仙台湾周辺、日本海側の秋田周辺で数多くの出土例があるが、北海道での出土はないため、東北などからの搬入はなかったと考えられる。

北海道・網走大曲洞窟から出土したアカニシの貝輪は、皮なめし具の可能性もある。環状のものが北海道で出土するが、ベンケイガイのように主体をなさない。礼文島・船泊砂丘第4遺跡から出たウバガイ（半環状）やエゾマキガイ（環状）もある（大島，1989）。

南海産あるいは暖海産の貝であるオオツタノハガイは北海道で出土するが、やはりベンケイガイのように主体をなさない。島根県小浜洞窟の貝輪が日本海側の東限であった。北海道・有珠モシリ遺跡でも環状貝輪が出土加工されたが、北海道に運びこまれた可能性が高い（大島，1989）。また縄文時代における北限出土例は岩手県貝島貝塚で、仙台湾を中心に東北地方に分布する貝輪はベンケイガイ製貝輪とともに関東地方からもたらされたものらしい。関東地方でも伊豆諸島などから入手していたといわれ、全国的にみて関東地方が分布の中心であった。縄文前期に出現したあと、徐々に盛行し、後期初めに出現ピークに達するが、その後、後期後半から晩期ではまったく出土例がなくなる。関東地方でまったく出土しなくなった時期に東北や北海道で供給されたというオオツタノハガイ製貝輪が出現するのは多少奇妙である。関東―東北ルートとの延長線とは別の供給ルートがあったと考えられるようだ。縄文前期から弥生前期の

着装の例で女性の左腕に一個のウミギク製のものがある (大島, 1993a).

一方, 弥生時代中期から12世紀にかけて南西諸島と九州とのあいだに貝類交易がさかんになり, 南西諸島産の白色貝輪材料として大量に取引されたものにゴホウラ, イモガイ, アンボンクロザメやダイミョウイモやシャコガイがある.

島根県西川津遺跡の貝輪が日本海側の東限にあたり, 一方, 太平洋側で東限になる兵庫県夢野遺跡のゴホウラは, 福岡県立岩遺跡で出土した成人男子の弥生人骨の右腕に14枚もの縦型貝輪がはめられていた (大島, 1989). 採取が容易でないうゑに, 他の貝輪細工に比べて加工の手間が複雑なイモガイは大形のもの加工された. 山口県土井ヶ浜遺跡と中の浜遺跡が出土の東限とされるが, ゴホウラやイモガイ製貝輪が北海道・第10有珠遺跡から出土しているのは, 南島と九州を結ぶ貝輪交易ルートが, 弥生中期初頭にはすでに島根半島にまで達していて, その延長線上にあると考えられる. 奄美・沖縄産のアンボンクロザメやダイミョウイモが北海道・伊達市有珠町の有珠モシリ遺跡で出土している. シャコガイの貝輪も南海産のものである (大島他, 1990).

マガキガイは指輪に, イモガイはプレスレットに, フトツノガイやホソツノガイはネックレスに, ミクロネシア・フェイス島で出土したショウジョウガイは耳飾りに加工された. また首飾りとして, ソロモン諸島・マライタ島で貝貨として通用するアマボウシガイ, キクザルガイの仲間, ハイガイの仲間やクロタイラギを数珠状にしたものにイルカの歯もつけ加えたものがある. パプアニューギニアの高地族の娘は胸飾りとしてシロチョウガイを飾る.

垂飾品や鯨歯製模造品としてイタチザメとホオジロザメの二種類に模したものがある. 白色貝を使用しているが, 小型であることと, 研磨が入念であるため原貝の特定は難しい. 縄文後期から弥生前期に限られて出土する. 鯨歯製品と並行して使用されていた. マクラガイ, ホタルガイ, ヤカドツノガイ, マルツノガイ, タカラガイ, 俗称ウラシマのカズラガイやカタベガイは北海道・有珠モシリ遺跡から出土していることから, 南海産のイモガイとともに南西諸島産のものが交易によって運ばれたのであろう. また, ペンダントとして有珠10遺跡出土の南海産あるいは暖海産のゴホウラの仲間がある (大島他, 1990).

オオツタノハガイには底型製品として組み合わせ式の貝輪がある.

玉類として, 螺塔部を研磨したマガキガイ, 貝殻内部のつくりが脆弱なため, 波に洗われて中空になった小型イモガイや, 海岸に打ち上げられて中央に孔があいた螺塔部だけの小型イモガイ, 有珠10遺跡出土で南海産あるいは暖海産のマクラガイ, ホタルガイやカタベガイ, 貝小玉にタマキガイ, チョウセンハマグリやベンケイガイがある (大島他, 1990).

装飾品としての貝にはゴホウラなどの厚手の白色貝, イモガイ, マクラガイ, タケノコガイ, フデガイ, タマガイ, ウミウサギやノシガイが装飾品として加工される貝である.

貝符 (貝札) として, ヒメシャコガイ, ヒレシャコガイやシャゴウガイ, さらに人骨に着装した状態で出土した大型イモガイ (体層部) がある.

二枚貝に粗孔を穿った有孔貝は, 貝錘と同様の形状で出土することから, 「死後網をかぶせたものであろう」との見方もある. リュウキュウザルガイ, ヒメシャコガイ, カワラガイ, メンガイ, イモガイ, ウミウサギや穿孔しやすい殻頂部を避けて中央部に粗孔が穿たれているオオベッコウガサが葬具にかかわる貝である.

7. 貨幣 (貝貨: shell money) としての貝

我々がふだん何気なく使っている買, 貨, 貸, 財, 貯などの漢字にも, 貝の字が使われているように貝はお金にまつわるものとして生活に深くかかわっている.

タカラガイはインド、フィリピン、インドネシアが主産地である。中国やインドでは紀元前より、西アフリカなどでは20世紀初めまで通貨として使われた。内陸部ほど通貨としての価値が高かった。

インド洋のモルディブ諸島の海に産出した何種類かのタカラガイは、アラブ・イラン系やインド人がモンスーンの季節風を利用して運航するタウ帆船 (dhow) によって東アフリカの大陸まで運ばれた、その後、アラブ人や黒人の交易商人などの手によって遠く西アフリカの奥地まで運搬されたタカラガイは金貨や岩塩と物々交換されたりした。

15世紀になって喜望峰を回る航路ができると、東アフリカを経てインド洋に達したポルトガル船はインド洋のタカラガイを大量に海路、西アフリカのギニア湾沿岸地方にもたらしようになった。広く内陸部まで貨幣として使われ、西アフリカの多くの言語で貝を指す言葉は、「おかね」という意味で用いたり、通貨の単位にしているところもある。ガーナ共和国では、タカラガイを意味する「セディ」が1960年の独立以後の通貨の単位として使われている。

キイロタカラガイ (メンタカラガイ) やハナビラタカラガイは、西アフリカで広く出回っているタカラガイである。前者はインド洋のモルディブ諸島に多く産し、個体変異が著しいタカラガイである。後者は東アフリカの海岸に多く産し、房総半島以南のインド洋や太平洋にも分布する。いずれもサンゴ礁や浅海に多産する貝である。

これらのタカラガイは西アフリカの内陸社会において比較的広く使われた貨幣である。しかしその重さのために不完全な貨幣として、中央スーダンではついに布貨 (嶋田, 1990) にとってかわることはなかった。嶋田 (1990) によれば、19世紀初期、西アフリカにおいては、タカラガイ2,000~3,000個が、1ドル銀貨1個 (オーストラリア製もしくはスペイン製銀貨) に相当していたという。その交換レートが、内陸部ではタカラガイ5,000個が1ドルに相当するが、海岸地方では1ドルがタカラガイ一万個以上に下落してしまうのは、ヨーロッパ船による大量のタカラガイが海岸部に運び込まれるようになったからである。マグレブ経由のサハラ交易で西アフリカ内陸部に持ち込まれたとみられているが、時代が下がるにつれて、ヨーロッパ船による海岸部への持ち込みが始まったこともある。しかもこの時、ヨーロッパ船が持ち込んだのは、従来のモルディブ諸島産の小型のキイロタカラガイ (*Cypraea moneta*) とともに、モルディブ諸島産のものより2倍以上も重いザンジバル産の大型のハナビラタカラガイ (*C. annulus*) だったためにタカラガイ貨の下落に拍車をかけたことになった。

ソロモン諸島の北部マライタ島で長さ1.5~2.5メートルの紐に通した数珠は、タフリアエと呼ばれる。キクザルガイの仲間4種の貝の他にハイガイ、クロタイラギやアマボウシガイがその材料になる (後藤, 1996)。

バラのように真っ赤なキクザルガイが上質できれいであるため、価値がある。マライタ島南部の貝貨であるファタファガとは、通常一対二のレートで取引される。現在も物々交換や婚資として通用している。紐に通したものの1本が40ソロモンドルで日本円で約2,000円に相当する (竹川大介, 私信)。4本で豚一頭が交換できるし、婚資として5~10本が新婦側に納められる。紐状にしたものは、イルカの歯1,000個とも交換される。真っ赤でもっとも高価な貝をフィライとして区別し、これだけでできたものは最高級の貝貨になる。

白い貝であるハイガイ (写真5-1~3) は西太平洋に分布し、泥底に多産する。有明湾に産するものは、同種であるが、亜種のレベルで異なる。クロタイラギは黒い貝で、アマボウシガイは少し焼いて暗赤色になっている。マライタ島南部でファタファガと呼ばれる貝貨はアマボウシガイだけを長さ1.5メートルほどの紐に通したものが四本で一セットになる。

ミクロネシア・ヤップ島でシンジュガイ、シロチョウガイやクロチョウガイが貝貨に使われ

る。またシロチョウガイはパプアニューギニアの高地族では最高の貨幣になる。

8. ステータスシンボルとしての貝

ニューギニアの高地人のあいだでは、シロチョウガイを三日月型に加工したものを儀式の時の徽章や財産として使われていたり、またシンジュガイが王や首長のシンボルになっている国がインド洋や太平洋に多い。

中央アフリカでイモガイを加工したものは、政治的、社会的な高さを示し、北米インディアンでは、カリフォルニア南部で取れたクジャクアワビが富と地位の象徴になっている。

シャンクガイ (Indian shank) は、オニコブシガイ科に属し、インド東南岸およびスリランカに分布し、外洋浅海に多産する。とくに左巻きの貝が稀産であるため、珍重され、インドでは金属の装飾などが施したものを楽器としても使うが、聖貝として崇められる貝である。

また、ギリシャ・ミコノス島では豊穡の象徴として、ジュームスホタテがある。その貝に立っているヴィーナスの図案がよく描かれるゆえんである。

9. 通信手段や楽器の貝

山伏などが吹き鳴らすホラガイは、とくに天台真言宗派の山岳仏教では山伏の携帯貝である。指穴がないため、貝の音域は狭く、通常、楽器としてよりは合図として使われる。またキビナゴ漁やイワシ漁の合図に使われたり、漁師頭がバカガイ漁をしている仲間にとりすぎないように警告の意をふくめてホラガイを吹いて漁の終了を知らせた。

朝鮮半島ではオガクと呼び、気鳴楽器に使われる。

熊本・苓北ではオニニシ (ツノニシ) を毎月の税金の納期を吹いて知らせた。

昭和40年代、ハマグリ背の部分に石などに擦り付け、孔をあけ、そこに口をつけ息を吹き込んで音を出すハマグリ笛で音色を競った (大谷, 2002)。

ポリネシアのタヒチ島やミクロネシアのヤップ島ではトランペットとして伝統的な民族音楽を演奏するのにホラガイを使う。貝を横吹きで用いるタイプもある。西ジャワではサラムカルと呼び、伝達手段として使う。

雌雄の殻が異なるトウカムリガイは、主に暖海域に生息し、ウニを食べる貝で、ソロモン諸島・マライタ島で葬儀などのときに村人を召集したり、イルカ漁を行うときの集合合図に鳴らす。

10. 咬毒を有する危険な貝

アンボイナガイをはじめ、ムラサキアンボイナガイ、ツボイモガイ、ソウジョウイモガイ、タガヤサンミナシガイの5種はとくに危険である。いずれも貝の先端から舌歯 (矢舌: radula tooth) を発射し、毒を注入する危険な貝である。局所症状として疼痛、発赤、腫脹、しびれなどが刺傷部や周辺部に現れる。全身症状として舌、口唇のしびれ、随意運動障害、呼吸困難などの症状が刺傷後、数分から20分ぐらいのあいだに現れる。刺傷部には一本の舌歯が突き刺さって残ることが多く、繊細な魚骨のように見える。全身症状はアンボイナガイに刺されると必発するが、抗毒素がないため対症療法に頼らざるをえない。

肉食性で、餌を咬毒によって麻痺させて飲み込むイモガイは毒器官 (venom apparatus) をもつ。咬毒による死亡例は、アンボイナガイとタガヤサンミナシガイによるものだけである (新城・大嶺・吉葉, 1996a; 新城他, 1996b)。

タガヤサンミナシガイは貝類を餌にしているが、アンボイナガイはイモガイの仲間でもっとも強い毒をもち、寝ている夜行性の小魚類を襲い、一飲みにする。この時に使う毒が脊椎動物

によく作用し、沖縄ではハブ貝を意味する「ハブナ」とか「アハクウ」、奄美では「ボットンニャ」と呼ばれ、沖縄で死亡が2例報告されている（新城・吉葉，1997，1998）。

奄美では終戦直後、住用村の小学生が刺されて重傷になったことがある。沖縄では昭和に入ってから4例の死亡が確認されている。そのうちの一人は32歳の男性で、海で刺されて急いで帰宅する途中、呼吸困難で倒れ、4時間後に死亡した。的確な治療法がないため、沖縄では傷口を切開したり、あるいは止血器を使い、毒の拡散を防ぐ方法がとられている（新城・吉葉，1997，1998）。

終わりに

冷凍システムが完備していない時代に若狭から京都にサバや塩といった日本海に産する食料物資が運ばれた。その街道は「サバ街道」とも「塩の道」とも呼ばれた。また江戸期に長崎から佐賀に通じる長崎街道は、砂糖が運ばれたルートである。そのため、佐賀には羊羹をはじめ、さまざまな菓子を生産する店舗を興し、今に伝える砂糖文化がある。

一方、陸上に発達した街道とは別個に、柳田国男（1978）がいう海上の道なるものもあった。陸とちがい、海に道標なるものはないが、古来、交易や生活物資を求めて潮の流れを読み、海の向こうの島に渡った人やものがあつた（武田，1994b；2003）。それが北前船で運ばれる「昆布の道」であつたり（大石，1987；武田，2002c）、あるいは貝の道（木下，1996）であつたりする。

とくに南の暖かい地方に産する貝は、種類に富み、採集も容易であるものが多い。南西諸島では、その先史時代から琉球王朝におよぶ、およそ3500年ものあいだ、貝殻を多用した、いわば「貝文化」ともいふべきものが独自に発達していた。それに使われた貝は巻き貝16科、二枚貝12科の計40種にもおよぶ。

南島産の貝製品は、サンゴ礁海域に生息する大型貝であるのが特徴である。貝文化を代表する貝符、貝製容器、貝斧、貝輪はすべて、イモガイ、ヤコウガイ、シャコガイ、ゴホウラ、サラサバテイ、オオツタノハガイ、オオベッコウガサといった大型の貝で作られている（大島，1989）。

南島の貝文化の成立は縄文早期から中期に求められる。響灘（ひびきなだ）沿岸地方から九州西岸を深く沖縄の島々にかけて、貝を求め、貝を運ぶ、まさに貝の道があつた。山口県の土井ヶ浜人をはじめとして、弥生人が手首にはめていた貝は、南西諸島にしか産しないゴホウラが主流であつた。白い貝の釧（くしろ）や垂飾は、女性たちが飾る単なるアクセサリーでなかつた。その貝飾は不思議な呪力をもつものとして、男たちも身に飾つた。とくに男にして女である双性の巫人は、女性同様の貝飾をしていた。単に美しいものとして人を引きつけてきた貝に昔の人たちは神秘性を感じとっていたことになる。

また絵画や唄などに取りあげられる貝もあつた。イタリアの画家ボッティチェリは名画「ビーナスの誕生」で大きなジェームスホタテの貝殻の上に立つビーナスの姿を描いた。貝をテーマにした歌に日本海沿岸山陰地方に伝わる民謡の一つ「貝殻節（かいがらぶし）」がある。この民謡に出てくる貝とは、鳥取県沿岸に生息していたイタヤガイを指すが、収集家にとっても、食用としても人気があるイタヤガイは殻長8センチで、日本および中国の水深10～80メートルに多く産する。同じイタヤガイ科に属するホタテガイは日本北部に分布し、殻長は22センチと大きく、我が国の漁獲水産上、重要な貝である。江戸時代の文政年間には、採捕したイタヤガイの貝柱を取り出し、乾燥させたものを中国に輸出していたほどの漁獲があり、隆盛をきわめ

たのである。当時、この貝を採捕していた漁師たちが手漕ぎの舟の櫓(ろ)に合わせながら唄ったものが、この唄である。その後、イタヤガイが激減したためにこの漁は衰退してしまっただが、ブリ網漁の舟歌として唄いつがれた。しかし、櫓に合わせて唄うこの舟歌は、動力船の普及とともに地元ですら忘れ去られてしまうかのようにみえた。ところが、昭和8年(1933)に温泉郷浜村で新たな民謡が作詞・作曲されたさいに、この貝殻節が採譜されたことと、昭和27年(1952)に朝日放送全国民謡大会で第一位となったのを機に復活したのである。その後、貝殻節の調べは全国津々浦々に知れ渡るようになった。そして、今では日本海を代表する民謡の一つになっている。

生業としては消え去ったイタヤガイ漁ではあるが、民謡の中でその命脈を保っていることになる。

謝 辞

この原稿は著者が兵庫県立人と自然の博物館に勤務しているときに担当した1995年春の特別展示の開催にあたり、配布した解説資料に加筆・訂正したものである。展示の開催と原稿の作成にさいして、以下の方々にお世話になった。遅ればせながら、紙上を借りて厚くお礼を申し上げる次第です。

兵庫県三田市の泉博子、沖縄貝類標本館の仲嶺俊子、沖縄県衛生環境研究所の新城安哲、菊池貝類研究所の菊池典男、大谷洋子、大原健司(大谷・大原の両氏は現在、西宮市貝類館)、北九州大学の竹川大介、国立民族学博物館の秋道智彌、宇治谷恵、スペースアルファ神戸の小巻正直、東北大学医学部第一解剖学教室の百々幸雄、札幌医科大学第二解剖学教室の村上弦、石田肇、大島直行(石田氏は現在、琉球大学医学部第一解剖学教室、大島氏は函館市教育委員会)、玉木女子短期大学の寺田貴子、天草在住のペン画家・中村清一郎、鳥取の中村節二、北海道東海大学国際文化学部の印東道子(現在、国立民族学博物館)、那覇在住のグラフィックデザイナーの宮城保武と琉球大学医学部第一解剖学教室の土肥直美の各氏である。

最後に草稿の段階で拙い原稿に目を通され、著者の誤り等を指摘してくれた大谷洋子さんには厚くお礼を申し上げる次第です。

注

貝は私たちの生活になじみの深いイカやタコ、磯遊びでよく見かけるアメフラシ、化石動物のアンモナイトなどと同じく、軟体動物の仲間である。鰓(えら)呼吸をするものがそのほとんどで、陸上に進出したカタツムリの仲間であるマイマイなどには、血管の発達した外套膜や肺呼吸をするものもある。

貝殻とは、貝が自分の体を守るために主に炭酸カルシウムで作出した「外骨格(がいこっかく)」であるといえる。多くの軟体動物は、胎殻(たいかく)と呼ばれる小さな殻を持って卵からふ化し、死ぬまで成長を続ける。貝の表面に現れた筋(すじ)の数で貝の年齢を知ることができる。いずれの貝にも外套膜があり、二枚貝では、殻の成長は殻のふちにそって外側へと伸びるが、巻貝では、サザエのように「らせん状」に成長するものや、アワビのように「かさ状」に成長するものがある。多くの巻貝は、殻の頂点から殻の「口」に向かって「右巻き」に成長する。

貝殻の表面には、さまざまな模様や美しい色が現れ、その特徴は、美しい「自然の芸術」としてコレクターを魅了するばかりか、貝の分類にも大いに役立つのである。

貝の祖先は今からおよそ5億5千万年前、この地球がカンブリア紀と呼ばれる時代に現れた。その後、さまざまな種類が進化し、アンモナイトなど一部を除く多くの仲間は、今も生き残っている。

貝の仲間は現在、地球上におよそ8万種から10万種が生息すると推定されている。その多くは、アサリやハマグリなどの二枚貝の仲間か、サザエなどの巻貝の仲間に分類される。進化史の中でさまざまな場所に生活空間を広げたために貝殻の形にも、その場所に適した固有の特徴が読み取れる。

砂浜に住む貝では、砂の中に身を隠すことが外敵から逃れる最善の策である。そのため、砂浜の貝はアサリのように水中を漂う食物をこし採るための水管だけを長く伸ばして、本体を砂の中に埋めているし、マテガイのように細長く穴を掘りやすい形の貝殻をしている。一方、波の激しい磯に住む貝は波にさらわれないようにする工夫を発達させている。二枚貝のイガイは、足糸で体を岩に固定し、カキのように貝殻を岩に張りつける。巻貝でも、荒磯に生息するサザエは貝殻の突起で、体が岩から転がり落ちないようにしている。また、同じ巻貝でも、アワビやヨメガカサは強い吸盤状の足で岩に固着し、低いかさ状の貝殻で波の抵抗を小さくして、波にさらわれないようにしている。

貝類は大きく、腹足綱、二枚貝綱と頭足綱に分類される。なお、本文で触れていない代表的なものを説明すると以下ようになる。

腹足綱には巻貝類、カサガイ類、ウミウシ類などが含まれる。通常、触覚、眼、広い足および螺旋状の貝殻の中に入った内臓塊をもつ。口の中には少数または多数の小歯がリボンのような構造の上に並んだ歯舌をもつ。足にくっついている角質または石灰質の構造物である蓋（ふた）をもつことが腹足類の一つの特徴である。およそ20,000種の海産腹足類がいるといわれる。

大形で原始的なオキナエビスガイ科は深海に限られる。現生種は16種おり、すべて角質の丸い蓋をもつ。切れ込みは外套腔内にある水を排出する口である。また、フジツガイ科はもっぱら温帯熱帯にすんでいて、大形の巻貝のホラガイ類を含む。殻はたいてい厚く堅く、しばしば毛状の殻皮をもつ。蓋は厚く、キチン質。卵嚢は岩に付着している。

カンムリボラ科は通常、熱帯のマングローブの付近の汽水域の泥底に生息し、蓋をもっていて、肉食性で、主としてカキ類などの二枚貝を襲う。30種ほどが現生する。

クダマキガイ科は軟体動物中、種数において最大の科である。外唇に切れ込みをもっている。浅海から大深海にまで分布し、歯舌には毒腺が連絡している。いくつかの種はイモガイと同じ方法で餌を刺す。

二枚貝綱には斧足類（ふそくるい）とも呼ばれ、ハマグリ類、イガイ類、カキ類が含まれる。体は側偏し、背側でかみ合う左右二枚の殻をもっている。通常、弾力性のある韌帯で結ばれている。一つまたは二つの閉殻筋によって両殻を開閉する。大部分の二枚貝では大きな足と、一对の水管と貝殻をつくり出す筋肉質の外套膜が各殻片の内側を裏打ちしている。頭部や舌を欠き、食餌は鰓（えら）で行う。現生の海産種が世界の海洋に生息し、一部は河川や湖沼に生息する。

頭足綱にはオウムガイ類やタコ・イカ類を含む。大きな眼、強力な嘴（くちばし）、吸盤のついた腕をもつ他の軟体動物とあまり共通点をもたないが、歯舌（しぜつ）をもつことや時には殻をもつことから類縁が深い。オウムガイやコウイカ類のように貝殻をもつものもある。いずれもオウムの嘴（くちばし）のような顎板（がくばん）と歯舌をもつ。およそ650種から1,000種の現生種の大部分は外用性のイカで、食用や釣りに利用される。

またアオイガイ科に見られる、薄質のプラスチック性のような舟形の殻は、雌の特殊化した腕から分泌され、卵の保育のために用いられる。アオイガイ類は世界の外洋に分布するが、数種しかいない。

かつて世界中に栄えたオウムガイ類は現在6種以下しかいなくて、南西太平洋に限られる。死骸はアフリカ東岸や日本など遠方に漂着する。およそ90本もの触手をもつ。各室には気体が入っているために海の中層で浮力を保てる。

注1：シジミは淡水ないしは河口域に生息する。大部分は紫色の殻をもち、厚く光沢のある殻皮をもっている。シジミもアサリやハマグリと同様に外国からの輸入ものが消費され、国際的になっている。輸入したものの、不要になったものが捨てられて日本産と外国産が入り混じり、区別の付かないシジミも出回っている（大谷洋子、私信）。

1938年にアメリカの河川に移入されたシジミの仲間は、セメント材料となる川底の小石に混じり、セメントの質を落としたこともある。

注2：青森県津軽半島北西部の潟湖（せきこ）である十三湖や、オホーツク海に面した知床半島の根付きの西側にある藻琴湖は、いずれも淡水と海水が混じり合う汽水湖で、寒シジミの採取地と知られている。殻の大きさが3センチメートルもあるヤマトシジミは、オホーツク海のプランクトンと藻琴川のミネラルが豊

かな味を生み出し、とくに「焼きシジミ」は格別コクがあり、美味であるという。鋤連(じょれん)で底土を押し、すくいとった寒シジミを篩(ふるい)にかけ、貝と小石などを選別したものが消費される。採取の光景はまさに冬の風物詩ともいえる。

注3: ミミガイ科に属するアワビ類は平底な巻貝で、内面は真珠光沢が強く、殻表に水を出す孔の列がある。70種が知られていて、いずれも浅海の岩礁にすむ。日本ではトコブシ(房総半島から九州および朝鮮半島南部に分布)やミミガイ(四国以南の熱帯および西太平洋域に多産)なども食用にされるが、潮間帯から水深20メートルまでの岩礁に生息するクロアワビ(北海道南部から九州、朝鮮半島南部、遼東半島および山東半島に分布)やマダカアワビ(北海道南部から九州、朝鮮半島南部に分布)は、とくに水産上重要である。

アワビの仲間は、多くの人に二枚貝の片側だけの貝だと思われているが、本当は巻貝の仲間である。幼い頃は普通の巻貝と同じように蓋(ふた)があり、成体になると蓋はなくなる。アワビは、このように「片貝」であるところから「アワビの片思い」のたとえになぞらえられる。また殻の内側に美しい真珠光沢があるため、さまざまな装飾品としても利用されてきた。なお、贈答品につける「のし」は、今では紙製品が使われることが多いが、昔はアワビの肉を薄く延ばして干したものが使われていた。

注4: 有明海や韓国の干潟におけるカキ採集やその採捕活動に関しては、武田(2001, 2003a)、武田他(1998)、Takeda, et al. (2001, in press)、李・武田(1999, 2000a, 2000b, 2001, 2002)と李・武田・鈴木(2002)を参照されたい。

注5: シャコガイはインド、太平洋の熱帯に生息が限られ、ハワイには分布しない。数種が現存する。シャコガイの仲間ではヒメシャコガイだけが穿孔性で岩礁に割り込むようにして生息し、他のシャコガイは表在性で、足糸で岩盤に付着したり、オオシャコガイのように海底や砂上にごろんと横たわっている。いずれも蝶番(ちょうつがい: 武田, 2002a)の方を下に開いた腹縁を上に行っているために反転した外套膜に太陽光線があたる。この外套膜に単細胞藻類を共生(共生藻)させ、光合成を行うため膜を大きく開いている。海の汚染に敏感であるといわれ、最近では乱獲もたまって激減している。寿司ネタや刺身用になるヒメシャコガイは沖縄ではアジケー、ギイラとかニグーと呼ばれ、サンゴ礁の香りに満ちた味覚は珍重される。

またオオシャコガイは、世界最大の貝で、太平洋の熱帯域の水深10メートル前後の海底に生息する。最大殻長137センチメートルの記録がある。インドネシアでは人食い貝といわれる。巨大な殻に腕や足をはさまれて、死亡することもあるが、かみつくことはない。沖縄にはフィリピンなどから幼生が流されてきて定着した可能性もある。これまで沖縄の宮古、八重山が北限とされていたが、数年前から沖縄近海にも生息するという情報はあった。沖縄の漁師からは「ジャンボ貝」とか「お化け貝」と呼ばれていた。宮古島の城辺(ぐすくべ)町の漁師が1994年11月に宮古島近海の水深約10メートルの地点から殻長55センチメートルの生きた個体を引き上げた。1メートル以上の化石が八重山では200個体以上発見されている。また1995年2月、沖縄本島近くにある伊是名島の海岸の工事現場でも見つかった。貝殻をもつ軟体動物としては世界最大の種で殻長1メートル以上、重さ250キログラムにもなる。熱帯で、サンゴ礁の発達した浅い海にすみ、体内にウズベンモウソウなどの単細胞性の鞭毛藻類を共生させ、そこから栄養をえて生活している。殻は古来、七宝の一つに数えられ、ヨーロッパでは教会の聖水磐として使われてきた。

注6: 貝の分類で多板綱とはヒザラガイ類を指す。超長楕円形で偏圧し、足は広いまたは狭く、内臓塊は低い。その上を双神経類などとして知られている8枚の殻板(貝殻)が重なり合って覆う。その殻はうろこや毛のはえている柔軟性のある肉帯に埋め込まれている。一般的に足が広い。同定は殻をはずして行い、およそ650種が知られていて、600種が現生する。多くのものは潮間帯の岩に吸着している。少数の深海種も知られている。ヒザラガイの名前は、岩から剥がしたときに膝が曲がるように曲がることから「膝のお皿」に由来し、和歌山などではゆでてお酒のつまみに食用とする(大谷洋子、私信)。鹿児島や和歌山などで地元の人が採集したものを食用としているものの、市場での販売はないと思われる。

注7: イタヤガイ科に属するイタヤガイ(*Pecten albicans*)は収集家にとっても、食用としても人気がある。殻長8センチメートルで、日本および中国の水深10~80メートルに多く産する。同じイタヤガイ科に属するホタテガイ(*Patinopecten yessoensis*)は日本北部に分布し、殻長は22センチメートルと大きく、漁獲水産上重要である。イタヤガイの仲間は、属の分類が込み入っているのが特徴であるが、区分けは人によってまちまちである。多くの種は殻の開閉によって泳ぐことができる。両殻で彫刻が異なる。熱帯に種類が多いが、少数種は極地方にも生息・分布する。

注8: ウミギクガイ科の貝はカキ類に似ているが、むしろイタヤガイ類に近い。英語では"thorny oyster"と

呼ばれる。歯舌は韌帯をはさんで歯と歯槽があり特徴的である。カイメン類や藻類が長いとげに生えるため貝のカムフラージュになる。形、色、とげは変異に富み、同定は困難を極める。殻の色は灰色より黄・橙・赤・褐色まで多岐にわたる。紀伊半島以南の西太平洋に分布するショウジョウガイは水深5～50メートルの岩礁上に普通に見られるが、房総半島以南の日本各地に分布するオオナデシコガイは、水深30～200メートルに生息するが、少産である。ダンドクメンガイやオモテガイ（メンガイ）は、紀伊半島以南からインド洋・太平洋に分布する。

貝柱は太く美味であるが、生息域が限られていることと、数多く採れないために賞味する機会はまだである。

注9：トウカムリガイ科の貝は主に世界の暖海域にすむ。雄の殻は雌の殻とは異なる。種間の交雑も起こるらしく、深海種はとくに同定がむずかしい。食物は主にウニである。

注10：タカラガイ科に属する貝は、海の巻貝の中でもっとも人気が高く、およそ200の現生種がいる。殻口は狭く、通常、歯舌があり、表面は光沢が強く平滑である。多くは暖海性で雑食性である。雌は円形に卵囊塊を産み、その上に座っている。外套膜は殻と同じようにカラフルである。

注11：サンゴ礁の大敵であるオニヒトデにとってホラガイは天敵である。ホラガイの長い物をオニヒトデの柔らかい口のあたりから差し込み、前足部でおさえて食べる。近年のオニヒトデの異常繁殖は、ホラガイを収集家がとりすぎたためではないかという説もある。ボウシュウボラもやはりヒトデ類を嗜好する。ペリンジャー幼生が3ヶ月以上遊泳性であることも、分布の広いことと関連している。

注12：カムリボラ科の貝は通常、熱帯のマングローブの付近の汽水域の泥底に生息する。蓋をもっていて、肉食性で、主としてカキ類などの二枚貝を襲う。30種ほどが現生する。

注13：古代紫染料として、シリアツブリ、ツロツブリが利用された。古代オリエントの文明国家では、紫色の布はたいへん高価なもので、ローマ時代は皇帝と元老院議員だけが着用した。ローマ滅亡後は、教会に採用された枢機官の公服に用いられた。

シリアツブリおよそ一万個から1.5グラムの色素しか得られなかった。その工場の近くには、これに使われた貝殻の貝塚が層をなしていたという（寺田貴子、私信）。この貝をとるのはフェニキア人が多く、シリア海岸ばかりでなく地中海西方に新産地を求めて、そこに新しい都市を建設した。それほど古代においてはこれらの貝は、紫の染色材料として黄金に匹敵する宝の貝であったことを意味する。

ペルーやポリビアでは、インカの時代より紫の染料として地中海とは異なる貝であるアワビモドキが利用され、現在でもインディオたちが布を紫に染めるのに利用している。

なお、2003年10月にスイスのリギスベルグ(Riggisberg)にあるアベック財団美術館で開催される「Dyes in History and Archaeology」の学会で寺田の共同研究者である Dr. Rolf Haubrichs が、近年の寺田らの成果をも踏まえて「Mollusc purple: a worldwide famous colour」というタイトルで発表する（寺田貴子、私信）。

注14：イモガイ科の貝は主に暖海の浅海に生息し、インド・太平洋にもっとも種数が多い。ある種のイモガイの咬毒は人間にも致命的なこともある。退化的ではあるが、通常、蓋をもつ。卵は財布形の卵囊に入れて産み出される。300種ぐらい知られている。イモガイ類がもっとも豊富なのは、熱帯西太平洋とインド洋である。深海種も今なお発見されつつある。日本には特別に冷たい水にすむ深海性種がいる。カリフォルニア湾からエクアドル北部にかけてはイモガイ類は豊富である。多くの種は固有種であるが、いくつかのものはカリブ海のものと同様、インド・西太平洋から来たものも数種いる。

西アフリカのイモガイ類は変化に富んでいて、種別があまり明らかでない。あるものはチレニアイモガイの変種であろうと思われるが、他のものは別種である。南アフリカのイモガイ類は、固有種とインド洋種と西アフリカ種の混合である。

注15：腹足類の中には卵を袋に入れて夜に産み出すものが多い。海はおずぎに利用されるものは、中でもテンゲニシの卵囊が大きく、革質で丈夫である。中にはおよそ5,000～8,500個の卵が産み出されるが、先にかえったものが次々と食べていくため、最後に這い出してくる稚貝はわずかに10個体ぐらいにすぎない。子どもたちが口の中に含んで鳴らして遊ぶものには、他にナス科のホオズキ (*Physalis alkekengi*) があり、球形で赤色の液果の中味の種子を取り除いたものを口に含んだ。

注16：八角形の貝桶は、外面は極彩色の宮廷絵巻などが描かれ、内面は金砂子が施されている（大谷、2002）。

注17：時には男性も参加することもある貝合わせの遊び方は、10～20人の女性が輪になってすわる。下座の一人が出貝を出す役になり、その右手で出貝桶を、左手に地貝桶を置く。地貝桶から貝をとりだして12カ月の12個づつ、さらに七曜日をあらわす7個づつ加えていきながら、敷物の上に360個の丸い輪を同心円状

に並べていく。そのさい、絵柄が描かれた貝の内側が見えないように下にして伏せる。並び終わると今度は、出貝桶から1個の貝をとりだし、輪の中心に伏せる。この出貝の斑紋や形状等から、この出貝と同じものを親指、人差指と中指を使い、360個の地貝から選び出し、出貝と合わせる。合った段階で初めて内面の絵を見て、確認する。この繰り返しを互いに行って、たくさん貝をとった方が勝者となる。

注18：日本画を描くときに用いられる胡粉（ごふん）は、瀬戸内海産のイタボガキの殻を砕いて精製した絵画用の白色顔料で、室町時代以降に使われた日本独自の絵の具である。貝あわせの場合（大谷洋子，私信），貝の一面に塗り，その上に日本絵の具で色をつけた。外套膜や貝柱などの，つるつとした貝の表面で色の塗りにくい所にも色がつきやすい。貝殻を粉末にした炭酸カルシウムの白色粉末と，「ふのり」を混ぜたものを塗る。色が綺麗に仕上がりに，また金箔が綺麗にかけられるために，いやな照りが無い。

注19：江戸初期から子供の遊びであった「べいごま」は，戦後，埼玉県川口市の鋳物工場で生産され，東京の下町を中心に大流行した。直径3センチメートル前後の円錐形をした独楽は芯がないため，結びこぶを二つつくった紐を巻いて回す。もともと巻貝の殻の中に砂などを詰めた。「貝独楽（べいごま）」が訛って「べいごま」になったといわれる。明治になってから鉄製のものが流行した。貝の口に溶かした鉛を流し込んだり，粘土を入れて安定さと重さをつけた。基本的な遊び方は，バケツや木製のりんご箱などに布を被せて縛った「床」や，蓆（ござ）を折り畳んだ上をめがけ，数人が一斉に独楽を回し入れる。自分の独楽が他の独楽にはじき飛ばされずに最後まで回り続けた独楽が勝ちを得る。べいごまの貝には，バイガイ，クボガイ，コシダカガンガラ，マガキガイやイモガイが使われた。クボガイやコシダカガンガラが特に選ばれたのは，貝の形状が鋭利なバイガイより平べったいために紐を巻きやすいことと，殻が厚く丈夫であることからである。

注20：日本の養殖真珠を産み出す母貝（ほがい）はアコヤガイといわれ，ウグイスガイ科に属する。今からおよそ130年前に発見された小型の真珠貝で昔からアコヤと呼ばれる。日本の房総半島と山形県より南の海に分布する。長いあいだ，日本特産種と考えられていたが，日本以外の，韓国，台湾，中国，香港，カンボジア，インドネシア，タイ，スリランカ，ミクロネシアにも生息していることから熱帯の海にも分布していることが分かった。潮間帯から水深10メートルくらいまでの岩礁の海底に足糸（そくし）で付着する。大きさは10センチメートルくらいで，左殻は右殻よりもよくふくらむ。内側は光沢をもち，閉殻筋（へいかくきん）は大きい。5～9月ごろ産卵する。今からおよそ130年前に発見された小型の真珠貝は，日本特産種と考えられていたが，韓国，中国，香港やスリランカなどでもこの貝を用いた養殖が行われている。

参考・引用文献

- 新城安哲・大嶺稔・吉葉繁雄（1996）アンボイナ刺症の1症例とイモガイ刺症の問題点。沖縄県衛生環境研究所報 30：43-52。
- 新城安哲・富原靖博・行田義三・吉葉繁雄（1996）琉球列島におけるイモガイ刺症の記録。平成7年度海洋性危険生物対策事業報告書 1-11。
- 新城安哲・吉葉繁雄（1997）琉球列島におけるイモガイ刺症の記録。平成8年度海洋性危険生物対策事業報告書 9-14。
- 新城安哲・吉葉繁雄（1998）琉球列島におけるイモガイ刺症の記録。平成9年度海洋性危険生物対策事業報告書 1-12。
- 荒俣宏（1994）「世界大博物図鑑 別巻2 水生無脊椎動物」。平凡社。
- 遠藤将憲・印東道子（2000）フェイス島ハサハベイ埋葬遺跡出土の貝類。北海道東海大学紀要人文社会科学系 12：165-181。
- 後藤明（1996）「海の文化史：ソロモン諸島のラグーン世界」。未来社。
- 魚類文化研究会（編）（1997）「図説 魚と貝の大事典」。柏書房。
- 川名興（編）（1988）「日本貝類方言集—民俗・分布・由来」。未来社。
- 久保田久喜（1987）「365日魚と貝の雑学読本」。啓明書房。
- 木下尚子（1996）「南島貝文化の研究：貝の道の考古学」。法政大学出版局。
- 小林達雄・春成秀爾・藤本強・田村晃一（1988）「日本文化の源流」。学生社。
- 李應喆・武田淳（1999）干潟の水産資源（第2報）：西海岸咸平湾における伝統的漁撈と採捕活動。佐賀大学

- 農学部彙報 84：11-27.
- 李應喆・武田淳（2000a）韓国・西海岸郡山周辺の漁撈と採捕活動～セマングム干拓事業の現場を見て～、九州・琉球湿地ネットワーク「日韓共同干潟調査中間報告書」112-115.
- 李應喆・武田淳（2000b）干潟の水産資源（第3報）：韓国・西海岸咸平湾における持続的資源利用と管理～カキの採捕活動を中心に～、佐賀大学農学部彙報 85：45-62.
- 李應喆・武田淳（2001）韓国・西海岸郡山周辺の漁撈と採捕活動～セマングム干拓事業の現場から～、日韓共同干潟調査団（編）「国境を越えた干潟への想い・日韓共同干潟調査2000年度報告書」163-167.
- 李應喆・武田淳（2002）干潟生態系における採捕活動～佐賀県肥前町大浦浜におけるカキの採捕を中心に～、地域漁業研究 42（3）：1-25.
- 李應喆・武田淳・鈴木廣志（2002）韓国の干潟における伝統的漁撈と採捕～西海岸咸平湾におけるカキの採捕活動を中心にした生態人類学的研究～、日本人類学誌 110（1）：9-25.
- 三島格（1977）「貝をめぐる考古学：南島考古学の一視点」、学生社.
- 望月賢二（監修）（1997）「魚と貝の大辞典」、相書房.
- 波部忠重（1975）「貝の博物誌」、保育社.
- 西宮貝類館（2002）「貝と人とのかかわり：貝を使う 貝で遊ぶ」（第4回特別展資料）.
- 大場俊雄（2000）「あわび文化と日本人」、成山堂書店.
- 大島直行（1989）北海道出土の貝輪について、考古学ジャーナル 311：19-24.
- 大島直行・川内基・石田肇・百々幸雄（1990）伊達市有珠10遺跡、日本考古学年報 40：347-352.
- 大島直行（1993a）南の貝の腕輪、森浩一・佐原真（監修）「考古学の世界 第1巻」ぎょうせい.
- 大島直行（1993b）続縄文文化をめぐる、宮良高弘（編）「日本文化を考える」、第一書房.
- 大石圭一（1987）「昆布の道」、第一書房.
- 大谷洋子（2003）貝と生活 ⑧「真珠（1）」、西宮市貝類館（編）、海辺からのたより 9：8.
- 大谷洋子（2002）貝と人とのかかわり：貝を使う 貝で遊ぶ、西宮市貝類館第4回特別展（平成14年10月10日～11月26日）配付資料.
- 沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室（編）（2001）「貝の道：先史琉球列島の貝交易」、沖縄県教育委員会.
- Rooney, Dawn F. (1993) *Betel Chewing Traditions in South-East Asia*. Images of Asia Series. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- セイファー, J. F.・ギル, F. M. (杉浦満訳) (1985) 「海からの贈りもの「貝」と人間—人類学からの視点から」、築地書館.
- 司馬遼太郎（1977）「木曜島の夜会」、文藝春秋社.
- 嶋田義仁（1990）裸族文化から衣服文化へ—西アフリカ内陸社会における「イスラム・衣服文化連合」の形勢、和田正平（編）「アフリカ民族技術の伝統と変容」国立民族学博物館研究報告別冊 12：447-530.
- Simard, Francois, Doumenge, Francois, and Cardon, Dominique (2000) *Parures de la Mer*. Musee Oceanographique Monaco Mai-Septembre.
- スティックス, H. 他（奥谷喬司訳）（1980）「貝：その文化と美」、朝倉書店.
- 武田淳（1994a）イノエの採捕経済：サンゴ礁海域における伝統漁法の多様性、九学会連合「地域文化の均質化編集委員会」（編）「地域文化の均質化」、51-68、平凡社.
- 武田淳（1994b）民族博物誌 8：パンノキ—太平洋のバイキングたちを支えた植物—、月刊みんぱく 12：20-21.
- 武田淳（1995）ブランデーガイ＜収蔵物紹介＞、ハーモニー 11：7.
- 武田淳（1996）ローム君の新・博物日記・たにし長者、朝日新聞7月27日朝刊・日本経済新聞7月30日付け朝刊.
- 武田淳（1997）ゴホウラ＜収蔵物紹介＞、ハーモニー 16：7.
- Takeda, Jun (1998) Plants and animals used on birth and death of the Ngandu (Bongandu) in central Zaire. *African Study Monographs*, Suppl. Issue 25:135-148.
- 武田淳（1999a）生きている化石：シャミセンガイ、佐賀大学全学教育センター広報 3：20.
- 武田淳（1999b）貝と生活：貝紫—幻の古代染色—、海辺からのたより 4：8.
- 武田淳・川端真人・松尾敏明（2000）ソロモン諸島ガダルカナル島タラウラ村における有用動植物資源と伝統

- 的な利用技術. 佐賀大学農学部彙報 85:19-43.
- 武田淳 (2001) 有明海の干潟生態系:生産性・多様性・持続的資源利用にみる伝統的採捕技術に関する研究. 地球環境研究第9回「地球環境財団研究奨励金」研究成果報告書(2) 49:65-84.
- 武田淳 (2002a) 貝と生活 ⑦「シャミセンガイとオオシャミセンガイ:有明海に産する生きている化石」. 西宮市貝類館(編)海辺からのたより 8:8.
- 武田淳 (2002b) 貝紫:貝がうんだ古代紫染料. 日韓共同干潟調査団(編)「国境を越えた干潟への想い」日韓共同干潟調査報告会資料集 8:9.
- 武田淳 (2002c) 森林部族ンガンドウの伝統的な医療と動植物の利用. 松井健(編著)「自然観の人類学」, 309-344, 榕樹書林.
- 武田淳 (2003a) 平成12年度~平成13年度科学研究費補助金(基盤(CX2))研究成果報告書「生物季節と伝統的風物詩:固有性・変異性・地方性の人類学的応用に関する研究」(課題番号12640695;研究代表者:武田淳) pp. 1-319.
- 武田淳 (2003b) パンノキ. 「月刊みんぱく」編集部(編)「世界民族博物誌」, 63-65, 八坂書房.
- 武田淳・大山了己 (1989) 八重山民謡にみるヒトとカニとの関わり. 季刊人類学 20(4):254-283.
- 武田淳・五十嵐勉・趙慶萬・李應喆 (1998) 干潟の水産資源(第一報):有明海における伝統的採捕技術と多様性. 佐賀大学農学部彙報 83:79-97.
- Takeda, Jun and Satoki Ohyama (1994) Man and crabs in Yaeyama folk song: Crab-species identification and folkzoological background. *Humans and Nature* 4: 99-124.
- Takeda, Jun, Eung Cheol Lee and Kyoung Mann Cho (2001) The anthropological and ecological importance of tidal flats to Japan and Korea with special reference to oyster-gathering activities. *Lowland Technology International* 13 (1): 56-68.
- Takeda, Jun, Eung Cheol Lee, Hiroshi Suzuki and Chul Hwan Koh (in press) Ecological-anthropological aspects of the traditional fishing and oyster-gleaning activities on tidal flats in Hampyeong Bay in the west coast of South Korea. *Lowland Technology International* 15 (2).
- 寺田貴子 (2001) 貝紫の話. うみうし通信 33:10-12.
- 柳田国男 (1978) 「海上の道」. 岩波書店.

摘 要

海や川に産する貝は, 人類とのかかわりは古い. 食料, 生活道具, 貨幣, 装飾品, 儀式的祭具などに利用してきたヒトの歴史はながく, 生活に深くかかわってきた.

とくに南の暖かい地方に産する貝は, 種類に富み, 採集も容易であるものが多い. 南西諸島では, その先史時代から琉球王朝におよぶ, およそ3500年ものあいだ, 貝殻を多用した, いわば「貝文化」ともいふべきものを独自に発達させてきた. 使われた貝は巻貝16科, 二枚貝12科の計40種にもおよぶ.

現在, およそ8万種から10万種の貝の仲間が, 地球上に生息するといわれる. その中から人類の生活に深く関わった貝との関係を地域資源と民族文化という視点から, 1. 食用, 2. 生活・生業用具, 3. 信仰や神事にかかわるもの, 4. 民間療法, 5. 遊戯用具, 6. 装飾品, 7. 貨幣, 8. ステータスシンボル, 9. 通信手段・楽器 の九つに大きく分類し, 考察した. さらに採取のさいに危険をとまなう貝の項目を一つを加え, 参考にした.

key words: 貝の利用, 地域資源, 民族文化, 採捕活動, 人類の進化



写真1 韓国・麗水(ヨース)で売られている
タイラギ(右手)とアカニシ(左手前)
(2003/10/22 写真は以下、いずれも武田が撮影)

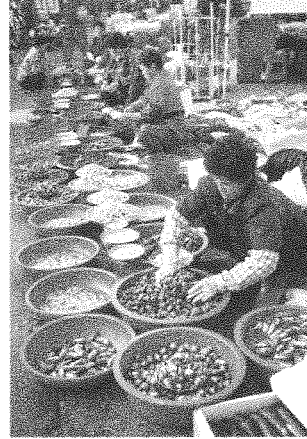


写真2 韓国・順天(スンチョン)の市場近くでのスナップ。

韓国の干潟は元気があっていい。また市場もいつも活況を呈する。おばさんたちは、干潟で採集されるマガキ、アゲマキガイ、アカニシ、ハイガイ、タイラギ、ユムシやエボヤなどの種々の魚介類を入れた器を街頭に並べ、売る準備をしている。
(2003/10/21 撮影)

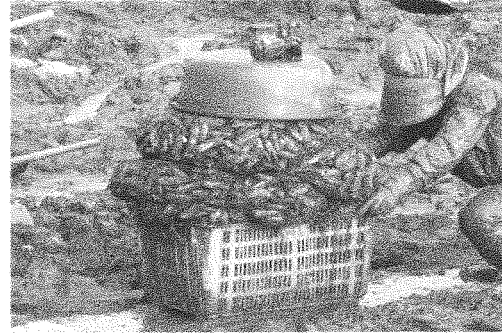


写真3-1~2 韓国・順天湾では女性がアゲマキガイ漁に精を出す女性たち。一人で一日100~120キログラム近い水揚げをあげる。殆どが日本向けに輸出される。
(2003/04 撮影)

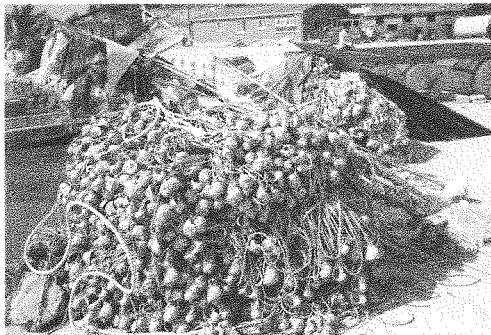


写真4 韓国・順天でのイダコ漁に使うアカニシ。
(2003/10/21 撮影)



写真5-1 潮が引いた干潟(韓国・順天)でのハイガイ漁。
(2003/10/22 撮影)



写真5-2~3 韓国・順天の干潟で潟スキーに乗り、じょれんを使ってハイガイ漁に勤しむ女性たち。
(2003/04 撮影)